町民文芸

只見短歌会　一月詠草　大塚栄一　指導

寒明けも間近と言ふに雪降らず自然も変はる時代が来しか　馬場　八智

新聞の記事にひかれてスクラップ整理もならず月日過ぎゆく　関谷登美子

連れ添ふて昭和の激動歩み来し六十六回の新年迎ふ　渡部ゆき子

囲ひより出でし石南花枝々に数多の蕾かすか膨らむ　目黒　富子

上の孫初めて一人で泊まりし夜下の孫(こ)何度も電話をよこす　新国由紀子

降雪の少なき日々の正月の写真を友にスマホで送る　渡部ヨリ子

ながら病めば食事の時のみベッドより下りる我が身ぞいつまでつづく　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　二月定例会　目黒十一　指導

山なみも一瞬見せて冬花火　弘子

あれこれと種の注文日脚伸ぶ　一恵

心の内語れる友や小正月　吉児

現場人背中頼もしや雪祭り　幸生

寒夕焼子どものたたく木魚かな　恒夫

薄氷の中にひろがる空の青　信

滑り止めの毛氈へ歩を雪まつり　礼

祝餅に触れて逃せり雪まつり　一穂

読めるけど書けない漢字鳥帰る　修一

ストーブの煮えたぎる湯や誰も来ず　都

雪浅しスノーダンプも置き去りに　味代子

旅先に思いを馳せる春ショール